資料紹介

ここでは、経済学部資料室収蔵の資料や、公開データベースなど、広く当室所蔵資料に関して紹介・解説する。

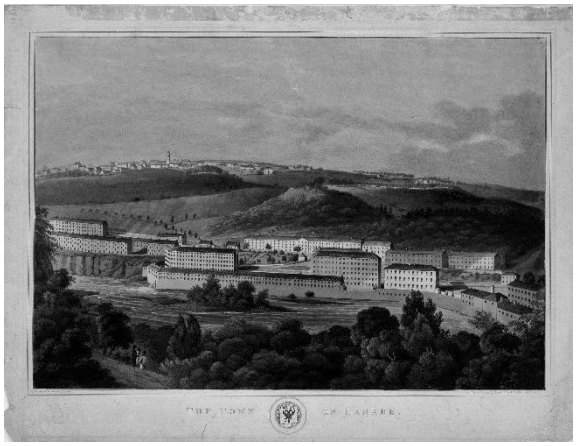
- オウエン文庫「THE TOWN OF LANARK」について
- 近世・近代社会経済資料デジタルアーカイブ

資料紹介

オウエン文庫「THE TOWN OF LANARK」について

東京大学経済学図書館所蔵のオウエン文庫は、協同組合、労働組合の先駆者で、環境決定論を主張したことでも知られる、ロバート・オウエン（Robert Owen,1771～1858）に関するコレクションである。

オウエン文庫は（1）オウエンの手稿類、（2）オウエン主義に関わる新聞・雑誌などのコレクション、（3）オウエン主義者の著作やオウエン研究のコレクションなどからなっている。



このなかに「THE TOWN OF LANARK」と題する彩色銅版画（額入り）1 点が含まれている。東京大学経済学図書館の所蔵資料は図書、雑誌等の文字資料が中心であり、彩色銅版画のような絵画、しかも着色された資料は極めて少ない。

ここに描かれるニュー・ラナークは、産業革命時の綿紡績工場と工場労働者用住宅からなるスコットランドの村で、ユートピア社会主義者であるオウエンも経営に関与し、その理想を具体化しようとした場所として知られている。

「THE TOWN OF LANARK」からは、水力を利用するために流れのほとりに建てられた、イギリス産業革命期の紡績機工場の特徴的な様子が容易に理解でき、文字情報のみでは伝わりにくい事実が、1 枚の銅版画によって視覚的に伝えられている。オウエンは 1800 年から 1825 年までニュー・ラナークの経営にあたったが、この作品は 1825 年のものである。つまり「THE TOWN OF LANARK」は、オウエンがニュー・ラナークに関わっていた最後の頃に描かれたものであり、まさに、オウエンが作り上げた理想郷をそのまま写しとっているとているといってよい。ニュー・ラナークは 2001 年に世界文化遺産に登録されており、この絵にある建物のいくつかはホテルやビジターセンターとして現在でも利用されている。

当該作品は、額縁に入った状態で購入され、そのままに置かれていたために保存状態が良好ではなく、このままでは額の裏に使用されているベニヤ合板の接着剤の影響による劣化がさらに進行すると予想される。画面上のシミ、汚れなどを除去、保存修復処置を施し、今後は額縁から出した形で保存すべきであろう。絵画作品という形状から考えても、図書と同様の形で一般の閲覧に供することは適当ではないと判断し、デジタル化した上で画像情報として公開することになった。これにより、広く利用者の眼に触れることになり、この資料のもつ豊富な情報が活かされるであろう。

なお、修復に際して額を解体したところ、絵の裏から別の絵画がもう一枚発見された。こちらの方は人物画（Miss. Close）であってオウエンとは

直接の因果関係はないが、同様に保存処置を施して保存することとなった。

（元研究支援推進員　宮下千代）

デジタルアーカイブ紹介

近世･近代社会経済資料デジタルアーカイブ

東京大学経済学図書館では、広く和洋の社会科学関連文献の収集に努めてきたが、その第一の目的は、この収集した資料を広く学術研究の利用に供することであり､このことは､その開設当初も、また、開設から 100 年以上経った現在でも変わりはない。しかし、所蔵資料の全てを、常時同様の方法で利用に供するわけにいかないことも事実である。

その所蔵資料のうち、刊行物については刊行時期によって管理の区分を設けている。和書の場合は、1800 年以前のものを「貴重図書」、明治 20 年（1887 年）以前のものを「準貴重図書」に指定して、図書館の書庫ではなく、資料室の保存庫に配置し、利用も閲覧に限定して、その価値やモノとしての状態に適した取り扱いをしている。また、文書等の一次資料についても､「特別資料」という区分を設け、貴重図書・準貴重図書と同様に、資料室での閲覧のみの利用としている。これは、その稀少性を鑑みての措置であるとともに、経年劣化の進行を抑えるという意味も持っている。

モノは必ず劣化し、いずれは消滅する以上、こうした取り扱いは、資料を維持管理する側からすると､理に適ったやり方であると言えるが､一方、利用者にとっては、資料へのアクセスのハードルが高くなることを意味する。これは致し方ない部分ではあるが、しかし、これでは、資料を広く利用に供するという図書館の使命を、十全に果たしているとは言い難いのも事実である。

こうした問題意識から、当館では、稀少な資料や、劣化して直接の閲覧を制限せざるを得ない資料については、代替物を作成し、より容易にアクセスできるよう、情報基盤の整備・改善に努めてきた。近年では、アダム・スミス文庫（アダム・スミス旧蔵の書籍類）を初めとする、西洋の古典籍について大規模なデジタル化をおこなったことが特筆される。このデジタルアーカイブ作成をきっかけにした研究会も発足しており、稀少資料の公開を通じての研究進展にも一役買っている（詳細は、本誌 4 号の特集記事を参照いただきたい)。

本稿で紹介する「近世・近代社会経済資料デジタルアーカイブ」も、こうした事業の一環として企画されたもので、その一部は、日本学術振興会の科学研究費補助金により作成されたものである（平成 25 年度研究成果公開促進費「近世・近代社会経済資料統合データベース」代表・本研究科教授・谷本雅之、課題番号 258061)。このデジタルアーカイブの対象は､主に日本国内の資料であり、具体的には近世江戸期から明治期にかけての古文書や刊行物が中心となっている。ちょうど、アダム・スミス文庫をはじめとする「西洋古典籍デジタルアーカイブ」と和洋で対をなすものと位置づけることができる。

平成 25 年度の事業では、近世の古文書、準貴重図書の一部、足尾銅山鉱毒問題コレクションなど約 1700 件がデジタル化され、「資料・文書目録&

デジタルアーカイブ検索システム Engel」のコンテンツの一部として、『土屋家旧蔵書』、『白木屋文書』といったコレクションとともに、既に公開されている。以下、簡単に利用の方法を紹介する。

図 1 Engel 簡易検索画面

デジタル画像データは、Engel に直接リンクされているものと、それ以外のデータベースにリンクされているものがあるので、注意が必要である。特に刊行物など東京大学 OPAC に書誌登録されているものは、その所蔵データを経由してデジタルアーカイブを閲覧する形をとっている。

図 2 Engel 書誌画面

図 2 は準貴重図書の 1 冊であるが、その本文リンクをクリックすると、東京大学 OPAC の書誌・所蔵画面に遷る。この所蔵画面の登録番号の欄に画像データへのリンクを示すアイコンがあるので、これクリックすれば、本文を閲覧することができる。(図 3)。

図 3. 東京大学 OPAC 所蔵画面

以上のような資料の代替化作業は、資料室が中心となって進めている、本館全体の資料保存業務の一環として位置づけられるものであり、その方策は、必ずしもデジタル化に限定しているわけではない。資料の特性や図書館運営の現状など、複合的な条件から勘案して、デジタル化ではなく、マイクロフィルム化や復刻出版といった方法をとることもある。

これまでの事業では、より古い資料を優先して作業を進めてきた。しかし、モノの状態だけを考えるならば、実は、今回代替化の対象とした近世から明治期にかけてのものより、昭和期以降の資料の方がより脆弱であり、優先的な手当てが求められている。ただし、こうしたより新しい時代の資料については、その分量が厖大であるという点、そして、公開にあたっては著作権をはじめとする諸権利関係を処理する必要がある点において、古い資料にはない課題がある。つまり、単純に一点一点を順番に処理していくのではなく、一定の基準を設けて優先順位をつけること、そして、代替物の作製と公開を別々に考えるのではなく、これを一連の過程として計画することが不可欠となる。

こうした課題に取り組みつつ推進されているこの代替化事業を通じて、稀少な資料が、学術研究のみならず、より広く一般に利用されるようになることを願って止まない。

(助教　矢野正隆(やのまさたか))